

氏名(本籍)	かん べ かず まろ 神戸和磨(愛知県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第36号		
学位授与の日付	平成10年12月16日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	親鸞の仏弟子論—仏性と一闍提—		
論文審査委員	(主査)	文学博士 教授	寺川俊昭
	(副査)	文学博士 教授	小川一乗
	(副査)	本学講師	池田勇諦(同朋大学教授)

学位請求論文審査要旨

I. 論文の性格

論者は真宗学の分野において、曇鸞の『浄土論註』および親鸞が『教行信証』に引文した『涅槃経』の研究という課題を中心として、多年にわたって親鸞の思想研究を進めてきた学究である。今回、学位請求論文として提出された、400字詰原稿用紙に換算して653枚に及ぶこの論文は、『涅槃経』が、「一切衆生 悉有仏性」として教説し、それに意味深い教示を受けた親鸞が、仏道の成立の根本に関わるものとして独自の理解をもった「仏性」の知見を、それと対極にあると考えられる「一闍提」の問題との連関において考察したものである。

この「仏性と一闍提」との緊張する関係を、論者はことに『涅槃経』が伝える阿闍世の回心を中心に考察し、ここに考究の焦点をおきながら、親鸞における「仏者の自覚」というべき主題を、論者の個性的な思索を読者に強く印象づけながら、論考を進めている。

「仏性」そして「一闍提」の問題を、親鸞は主として『涅槃経』に依りつつ、『教行信証』の「信巻」「真仏土巻」において主題的に論述するのであるが、就中「信巻」で親鸞は、『涅槃経』がいわゆる「王舎城の悲劇」の中で阿闍世の救いを語る教説を、長文にわたって引文する形で、「仏性と一闍

提」についての問題に、独自の推究を行っている。当然、論者はこの論述に大切な意味をみて、この考察に相当の紙数を費やしている。

この『涅槃経』の引文によって親鸞が凝視する衆生の問題性は、「謗大乘・五逆罪・一闡提」の三つであるが、親鸞はこれを「難化の三機・難治の三病」と呼び、ただ「大悲の弘誓・利他の信海」によってのみ癒されるものとしている。

ところが、この重い問題性の推究は、「信巻」の論述の展開からすれば、本願の信によって実現する人間像である「真の仏弟子」の悲歎述懐と連なっている。真の仏弟子の自覚は、この自覚に特有の悲歎として、

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし。

という深い痛みをもつものであるが、この痛みが鋭く内感する、衆生に伏在する最も重い問題性を、親鸞はさらに『大無量寿経』が本願の救済に除かれるものとして説く、「五逆・誹謗正法」の教言を憶念しつつ、それを重い「罪障性」として『涅槃経』の「謗大乘・五逆罪・一闡提」の教説に聞思していったものと考えられる。「信巻」の論旨のこの展開を踏まえて論者は、その論考の内容からいえば、最初に一言したように「親鸞における仏者の自覚」を考察したものと理解されるこの論文を、敢えて「親鸞における仏弟子の自覚」と題したのであろうかと、理解する。

親鸞における仏者の自覚を問うとき、「仏者」すなわち仏道に自覚的に立った者というその自覚の成立する根本のところに、論者は「仏性の自覚」をみる。この仏性を「仏教が仏道として成り立つところの基本、根本に関わる事柄である」と、論者は理解するのであるが、その仏教についていえば、いわゆる聖道門と浄土門、ことばをかえていえば自覚教と救済教という二つの伝統として展開していることは、否定しようのない歴史的事実である。

仏性とは、成仏の可能性と了解されるのが一般である。その仏性について、聖道の伝統は「有」とし、浄土の伝統においては「無」とすると理解されることがしばしばであるけれども、ことに如来の救済を生命とする真宗においては、凡夫である衆生に本来法爾として仏性があると認めるか否かが、仏教としての真宗の大きな課題として、さまざまに議論されてきたのである。

これに対して論者は、浄土真宗を単純にもしくは端的に「救済教」と理解

することは、果たして十分に適切であり、かつ正確であるかを吟味する。そして曾我量深の啓発的な見解である、「如来の救済の根源には、法蔵菩薩の本願の自証がある」に示唆を得て、親鸞開頭の仏道である浄土真宗は、単純に「救済の仏教」であるとするにとどまらないで、さらに「自証の仏道」とみる眼がなければならぬと、論者はいう。論者のいう「自証の仏道」としての浄土真宗とは、如来の無上涅槃の功德を、この穢土の現実の中にあって信心が自証するという自覚道を意味するようである。その自覚道を親鸞は、「法蔵菩薩の本願を自証する」信心は、それを得た衆生を現生に正定聚に住せしめるのであるけれども、そこに実現する「正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る」仏道として、力をこめて語るのである。そして、このような涅槃道を実現するものが、如来の本願であることを親鸞は明らかにしたのであり、この点に真宗を「自証の仏道」とみななければならない特質があると、論者はその論考を進めるのである。

このような視点に立って、親鸞の仏性了解を尋ねたのが、この請求論文の性格である。その論考の性格をよく示していると思われる考察を、ここに引いておこう。

衆生の病は、謗大乘・五逆罪・一闍提の必死不可治の病である。その衆生の病は、もはや自己回復を喪失した、菩提心に死せる人の病である。一体、その五逆・謗法・一闍提の死せる人の病の回復はあり得るのか。そこに、仏陀の入涅槃に際したなかでの、仏の全生命を託した仏道成就の大いなる課題が残されている。(中略) そのような衆生的人間、菩提心に死せる必死不可治の病を治癒する「醍醐の妙薬」とは何か。親鸞は、その病の治癒力を、「本願醍醐の妙薬」と見定めてくるのである。一体、仏道に絶縁した者の救済はあり得るのかという、大乘菩薩道の実現に立つ、『涅槃経』の主要テーマである“仏性と一闍提”の課題が、そこにある。そして、人の生きる地獄・餓鬼・畜生の最悪の身土の因となっている不具信、断善根の衆生の病の内観においてこそ、仏の衆生的世界全体への関心、衆生救済への意志・意欲は、初めて果逐されるといえる。

II. 論文の概要

この請求論文の概要と構成は、その目次に示されているとおりである。

はじめに

第1章 浄土真宗の仏性観

第1節 親鸞における仏性了解

第2節 法然の仏道観——特に「悉有仏性」を中心として——

第2章 浄土真宗の歴史観

第1節 二尊教

第2節 希有の法界とその成就——「希有」と「諸有」——

1 本願史観

2 仏陀の正覚体験

3 機教相応

4 法蔵菩薩

第3章 誓願一仏乗

第1節 回向論——聖徳太子の示現——

第2節 浄土の僧伽

第3節 誓願一仏乗

第4節 仏弟子の道

第5節 阿闍世の救い——仏性と一闍提——

第4章 願生浄土

第1節 如来の作願をたずぬれば——往相回向の行信——

第2節 願生浄土——三願的証——

むすび

第1章 「浄土真宗の仏性観」の論述の概要

この章で論者は、浄土真宗の仏性観を問う論者の立場を、まず明確にする。「はじめに」で論者は、真宗の仏性論として幾つかの説があるけれども、その共通の立脚地として、「行巻」に親鸞が「他力とは如来の本願力なり」と述べているのに基づいて、浄土真宗を救済教としてのみ了解する見解があることを指摘し、この見解に立って、自覚・自証の仏道において「衆生の成仏の可能性」である仏性を、浄土真宗は認めるのか否かが議論されてきたと、反省する。

この反省に立って論者は、このような真宗理解は十分に適切か否かを問い、曾我量深が提示した、「如来の救済の根源には、法蔵菩薩の本願の自証があ

る」という「独創的」な見解に大きな啓発を得たことを述べ、この真宗理解をもって、仏性を尋ねる論者の立脚地とすることを述べている。この立脚地から論者は、「誓願一仏乗」と「三心一心の問答」を中心にして、『教行信証』の仏性了解の課題を尋ねたいと、この論文での論考の課題と立場を明確にしている。

さらに論者は、親鸞が「よき人」と仰いだ法然の仏道を、仏性という課題的関心に立って推考する。そして選択本願の念仏を自覚的立脚地として、「捨聖帰淨し」「捨雜帰正」する廃立をその立場としつつ、仏道の根源を見据えた法然の仏教史観を尋ね、法然において「仏性と一闡提」がどのように了解されているかを、『選択集』・『漢語灯録』・『和語灯録』に尋ねている。論者はいう。

法然の仏教観において凝視された十悪、五逆、謗法、断善の闡提とは、聖なる超越界へ人間・凡夫を否定し超克していく行の立場に対して、どこまでも衆生を煩惱具足の罪業の身として荷負する、大地に立つところの仏道に立っての人間観であったといえる。

つまり、法然の仏道観は、聖への超越界にみづからを聖者として位置づけていく、向上的な修道の歩みに対して、最も低い一有情の人類史、愚癡・群萌の大地において、仏陀の自内証が何であったかを再認識する仏教史観である。

第2章 「浄土真宗の歴史観」の論述の概要

法然は、彼が独立を宣言した「浄土宗」の立教開宗の依り所として、周知のように「三経一論」を挙げている。三経すなわち『大無量寿経』『観無量寿経』および『阿弥陀経』を挙げるのであるけれども、その信念を「選択本願の念仏」と表明する法然であるから、根本教説と了解していたのが『大無量寿経』であることは、いうまでもない。さらに親鸞は『教行信証』の冒頭に「それ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経これなり」と、はっきり宣言している。その『大無量寿経』の特質を、すでに述べた曾我の「如来の本願の根源には、法蔵菩薩の本願の自証がある」という見解を中心に、『涅槃経』との対比をとおして考察したのが、この第2章である。

「第1節 二尊教」で論者は、釈尊の遺教である『涅槃経』が、「仏身に生身あり、法身あり」と説き、また「仏身は有為法なり、無為法なり」と説

く課題と、『大無量寿経』の「二尊教」の思想とを考察している。

釈迦・弥陀二尊の恩徳について、論者は例えば次のように述べているが、その了解はけだしの確であろう。

阿弥陀なる法身の悲母から背き出てしまった衆生を、本来の家郷に帰れと、慈父のごとく真実の灯を教示してくださった(のが、釈迦)である。釈迦と衆生の関係は、釈迦(の名が表すもの)は、浄法界等流に眼見した大聖の勧めであり、衆生(の分際)は、その家郷に昏く、無明流転していく歴史にある。そこに慈父の如き釈迦は、法界から背き出た衆生、この世を精神界の孤児として生きる衆生に、法界の悲母・如来の大悲の心に目覚めよと招喚し、発遣するのである。

これに対して『涅槃経』の知見は、独自の表現とあいまって、その真実義を読み解くことは容易ではない。それについて論者は、仏と衆生、見仏性と不見仏性との対応を、例えば、「以不生仏性故則煩惱怨生」と「以不生煩惱故則見仏性」と説かれる。その「不生」の二重構造に着目して、了解しようとしている。それを、「仏性を生ぜざるによって煩惱の怨生せしめ(流転)、煩惱を生ぜざるよって仏性を見る(還滅)」という、この世の煩惱に埋没した流転の生と、この世の煩惱を超越し、勝過したところの涅槃の生という、全く質と次元を異にした相容れない一線、絶対否定をもって関係する構造」において、「その二極を一つに結び、転成する真理の力用こそ、仏の大悲心である」と了解するものである。この見解が、論者の仏性了解の基本をなしているように思われる。

第2節の「希有の法界とその成就」は、かなり個性的な題であるが、論者はその副題が示しているように、『大無量寿経』が衆生における信心の成就を、「諸有衆生、その名号を聞いて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまえり。かの国に生まれんと願せば、即ち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。」と説く教言に注目して、『大無量寿経』において仏性の知見がどのように「本願論」として説かれ、展開されているかを、考察している。

その考察に論者は、本願史観・仏陀の正覚体験・機教相応・法蔵菩薩という項目を立てて論考を進め、本願の救済と自証の課題について相当に掘り下げた推考を展開している。

第3章 「誓願一仏乗」の論述の概要

この章の論述が、この請求論文の中心をなしている。その回向論—聖徳太子の至現—で、論者はまず法然の開拓的意義に言及する。その「ただ念仏して」という純潔な信仰の道は、長い間仏教の形態が能力・資質といった人間の側の価値を基準とするものであったのを廃棄して、「一切衆生 悉有仏性」の一乗の法が、どこまでも歴史の中で抑圧と困窮の中に苦悩して生きる人びとの上に、「一乗の機」として証しされていく信仰の自覚道であったと、論者は、その了解を示している。

その法然に親鸞を導いたものは、聖徳太子であった。その太子について論者は、「どこまでもこの世俗・世間道にとどまり、共にこれ凡夫のみ」という大地に、南無仏と「篤敬三宝の道を証示」した人と了解する。そしてこの太子から親鸞が得たものを、和讃がよく示しているように、『教行信証』の骨格である如来二種の回向という知見への導きであったと、その論考を進めている。

第2節においては、親鸞の「非僧非俗」の自覚に立っての「愚禿積親鸞」の名のり、そして「無戒名字の比丘」の痛みを『末法灯明記』に尋ね、「法然、親鸞の系譜において見定められてくる、愚の地平を立脚点とする仏道とは、群生・群萌の衆生性、つまり群萌の一乗の大地において、仏陀（法身）の教えを新たに顕揚するもの」と、その論考を結んでいる。

第3節 誓願一仏乗。親鸞は『末灯鈔』の書簡において、「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」としるしているが、同じ知見を「行巻」では「誓願一仏乗」「弘誓一乗海」と語っている。それは、「如来の誓願によって、群萌として生きる者に実現する無上仏道」というほどの意味であるが、論者はこの誓願について、「無明の衆生は、その本来の家郷を見失い、法身すなわち如来の生命の国土から背き出て、異なる存在者として、自我に固執し続けて生きる「逆謗闡提」の身である。(中略)人間の企図と要求において、罪の身を脱しようとしてみても、超出不可能の身、それは、「逆謗の屍骸」といわれる断善根の一闡提にはかならない。いま、法身の誓願・名号は、大悲の誓願を以て私たちの罪を転成せしめるところの力である。」と了解する。この了解に立って、親鸞が「行巻」の一乗海積で、仏陀の説法の始終である『華嚴経』と『涅槃経』を引くその教説によって、親鸞の仏性了解を推考している。

第4節 仏弟子の道では、1・世雄の悲、2・聞不具足の邪心、3・信不

具足の金言、4・真仏弟子という主題を設けて、論者は本願力回向の信を、ことに「懺悔」に立って推究している。それに続く第5節 阿闍世の救いの論考は、「信巻」にひかれる『涅槃経』が伝える阿闍世王物語を中心にして、当時のインドのパラモン教、六師外道さらには仏教興起の歴史的背景を通しつつ、この主題を推究し論考したものである。その副題「仏性と一闍提」が示しているように、この節の論考がこの請求論文の主要部分をなしていると考えられる。

ここで論者は「信巻」に引かれる北伝の『涅槃経』だけでなく、さらに南伝の『涅槃経』等にも依りながら、王舎城の悲劇における阿闍世の苦悩を浮き彫りにしている。そして、「阿闍世のために涅槃に入らず」ということばをキーワードとして、「正法の王」といわれた父頻婆娑羅王を「王者の剣」をもって死に追いやった阿闍世の心の葛藤と苦悩を、そして母をも殺そうとした阿闍世を制止した「是施陀羅」の一言が、カースト制からの解放を求め続けた釈尊の教化の全てを否定する深刻な意味をもっていたことを、さらに本願における「唯除五逆誹謗正法」の抑止が、もと王舎城の悲劇における逆悪を意味していたことを、そして月愛三昧に象徴される如来の大悲に触れて回心する阿闍世の救いの意味を、論者は内観的推究というべき個人的な思索に依って、克明に推究・考察を進めている。

「第4章 願生浄土」においては、論者は「如来の作願をたずぬれば 一往相回向の行信一」と「願生浄土一三願的証一」の二節を設けて、その論考を展開している。それは往相回向と還相回向の二種の回向という、親鸞が世親および曇鸞が示した「回向」の知見に教示を得、それを継承し展開した独自の回向の知見を、正確に承知しようとした論考である。

親鸞は浄土真宗という大乘の自覚道のすべてを支えるものを、往相の回向と還相の回向という如来の二種の回向の恩徳であるとするのであるが、さらにこの二種の回向の恩徳を衆生の上に具体的に実現する自覚的契機を、真実の教行信証であるとする。

いい換えれば、衆生が真実の教行信証を獲得したとき、そこに実現する自覚道を、親鸞は「浄土真宗」と呼ぶのである。ただし、この章での論考の主な内容は、親鸞の二種回向の知見形成の近い依りどころである曇鸞の「回向の二相」の思想を、『論註』によって推究することに費やされている。論者が曇鸞が「回向に二種の相あり」と語る回向の往相・還相の知見についても

った了解は、例えば次の如くである。

往相廻向は、仏の功德が法蔵となってすべての衆生を「有仏」の国、浄土に共に生れさせようという作願のはたらきのことであり、還相廻向は、仏の功德が穢土、「無仏」の国を包んですべての衆生を共に教化しようと、一切苦悩の衆生を観察するはたらきのことである。

さらに論者はこの回向について、次のように述べる。

「廻向為首得成就大悲心故」の仏道は、『論註』の最後に『大無量寿経』の文に照らし三願の証として示される。阿弥陀如来を増上縁となす念仏往生の願（第十八願）の功德が必至滅度の願（第十一願）、念仏往生の願の目覚めに正定聚の機を得る往相廻向の利益、「自利行成就」を明らかにし、還相廻向の願（第二十二願）は衆生を教化する利益、仏の「廻向利益他」のはたらきである。その廻向の二種によって、速やかに自利利他の無上仏道を成就する道は明らかにされている。

そしてこの三つの本願のはたらき、換言すれば往相と還相の二相をもって行ぜられる回向の菩薩行によって衆生に実現する仏道を、論者は「願生浄土」の自覚道であると了解して、この章題を掲げたものと思われる。

Ⅲ. 審査の概要

釈尊の晩年に起こったといわれる、いわゆる「王舎城の悲劇」は、当時のインドにおける最も有力な国家であったマガダの王家に起こった、王位の継承をめぐる事件である。

その事件には、釈尊その人、およびサンガの継承者であろうとしたデーヴァダッタ、釈尊に深く帰依し「正法の王」といわれたピンピサーラ、デーヴァダッタが親近し、父の王を殺して王位についたアジャータシャトルが織りなした事件である。

この事件はさまざまな意味で仏教を改めて問わせる深刻な意味もっていたので、それが仏教者たちによって伝承され、その意味がいくつかの視点から問われてきた。例えば『観無量寿経』は王妃ヴァイデーヒを中心にして、のちの仏者善導が「広開浄土門」と洞察したような、苦悩にせめられた人間に動く「清浄業処」すなわち浄土を求める祈求、これを中心に事件を促している。また、『涅槃経』は父の王を殺して王位についたアジャータシャトルを中心に、罪におののく人間の懺悔を中心に、この王城の悲劇を伝えている。

真宗においては、『観無量寿経』および善導の『観無量寿経疏』によってヴァイデーヒーすなわち韋提希が身をもって示した「願往生」の祈求と、それを満たす往生浄土の仏道が明確化された事件として、この王城の悲劇を理解する関心が、基本であり、かつ一般である。

親鸞はその、『教行信証』の論述からも窺えるように、韋提希とともにそれ以上に阿闍世に対する関心を強くもっている。論者がこの論文において、「仏性と一闍提」という関心に立って親鸞の仏道の了解を論考したのは、親鸞の阿闍世に対してもった強い関心を洞察し、それに論者自身の仏道了解への意味深い教示を感得したからであろうと、理解される。

王舎城の悲劇を、阿闍世を中心に考察する論者の論考は、きわめて細心かつ重厚である。漢訳の『涅槃経』だけでなく、南伝の諸経典をも参考にしながら、論者はこの事件の意味を、例えば次のように促えている。

注目されることは、仏法（正法）の秩序と王権（剣）の支配の対決のなかの悲劇であるということである。そして、その背景には、古くからのインド社会の生活習慣としてあるバラモンの司祭文化、また、バラモン教に拮抗する、六師外道の思想のなかに、仏教とは何かが、人間の生きる業縁の大地に身命をかけて戦いとられていく、戦いのなかの、悲劇であったといえる。いい換えれば、仏法興隆の志願がこの地上の歴史に証しされ、建立されていく大いなる機縁であったと了解できよう。

このような視点に立って、論者はさらに「無道に母を害せん」とした阿闍世の行為を制止するとき発せられた、「刹利種を汚すもの」、「これ梅陀羅なり」という問題的なことばが意味するものを、カースト制を視野の中に入れてながら尋ねている。さらに殺父の行為をなしたことを、「罪なきに父の王を殺した」と懺悔し罪責の念に責められる阿闍世が、「月愛三昧」にあって阿闍世を迎えた釈尊の大悲によって回心し、身を責める罪責の痛みから救われていく過程を克明にたどり、そこに主題である「仏性と一闍提」という意味深い問題を推求していくのである。全体の考察は、真宗学独自の方法である「内観」に立ってなされているのであるが、全体の論考はきわめて説得的であり、読むものに共感と強い印象を与えるものである。

論考の中心は第3章にあり、前二章はその予備的もしくは基礎的論考という性格をもつと理解される。また、第4章は、主として曇鸞の回向思想を『論註』に依って考察したものであるが、親鸞の独自の回向了解の予備的考

察という性格をもつ論考であり、論者自身が述べているように、今後の研究にまつ課題の提起と理解される。

尚、論考は相当に個性的であるが、文章がやや生硬もしくは不整である箇所が多く、文意やや不明の印象を与える箇所が散見される。相当の工夫が要請されるところである。

以上の講評に立って、審査員一同、神戸氏提出にかかる学位請求論文を、十分にその価値あるものと判定した。

尚、副論文として添えられた『無量寿経優婆提舍願生偈註』は、平成9年度の真宗大谷派安居における研究であるが、『浄土論註』全文の現代訳、およびその講解である。親鸞の思想研究の基礎的資料の一つであるこの『浄土論註』の研究は、それとして積極的な意義のある研究として、評価することができる。

IV. 最終試験および語学試験

審査に必要とされる最終試験、および語学試験については、10月28日に3人の審査委員が出席して、論者に対して試問を行った。

この試問において、論者が学位規定に必要とされる学力を有することを、審査員一同確認した。